

# 天台梵語讚譜本における記号「火」「延」「一」について

浅田 健太朗

はじめに

声明譜は歌謡の特徴を視覚的に表現するという特質をもつことにより、通常の表記では掬い取られないような音韻上の特徴を反映することがある。沼本（一九九七）が指摘した天台声明譜の小書き表記もその一つであるが、筆者もかつて、浅田（一九九八）においてこの小書き表記の機能について論じた。本稿ではこれらの研究を踏まえながら、特に声明の一つのジャンルである梵語讚の譜本に注目し、そこで使用されるいくつかの記号についてその機能を考察するものがある。

天台宗の梵語讚の多くは円仁が日本に将来したと考えられており、<sup>2</sup>将来当初の梵語讚は、梵語の言語的特徴の影響を大きく受け、音楽的抑揚も少なかったとされる（沼本、二〇一一）<sup>3</sup>。それが徐々に音楽として複雑化していくなかで、中世以降の譜本では言語的特徴がどのような形で音楽のなかに伝承され、それが譜

本に埋め込まれているのか、その実態を把握してみたい。

## 天台宗梵語讚の譜本について

梵語讚の詞章は、ほとんどが密教経典、儀軌類に見える梵文偈から採られたものである。周知の通り、梵文偈の音訳漢字には、梵語と中国語の音韻的な差を埋めるために「二合」や「引」などの諸記号が使用される場合がある（沼本、一九九七、二〇一一）。にもかかわらず、鎌倉期以降に作成された梵語讚の譜には、そのような「二合」「引」などの諸記号が基本的には見られず、その代わりに声明譜に用いられる特有の記号が使用される。この事實は、日本における声明が単純な旋律に詞章をのせて唱える形から、次第に音楽としての複雑さを獲得していくにつれ、梵語の発音を再現することよりも、音楽としてのデイトールを再現することを優先させた結果と受け取ることが出来る。

すなわち、鎌倉期以降に多くの声明譜が複雑な記譜法によつて作成された事実の背後には、梵讚の誦読において、原梵語の発音注記である「二合」や「引」などの指示する情報の重要性が薄れる一方で、他の音楽的な情報が重要になつたという事情があつたのではないかと推測する。

このような状況の中で、天台宗の梵語讚譜本には、字音で直読する声明の譜本とは異なる記号を用いたり、同じ記号でも異なる機能を有しているものが見られる。そのなかで本稿では、「火」、「延」、「一」の三種の記号を取り上げ、天台宗梵語讚譜本において各記号がどのような機能を有しているかを明らかにする。

## 「火」

声明譜において用いられる記号「火」については浅田（一九九九、二〇一四）で既に取り上げたが、今その調査の結果を一言で要約すれば、基本的には指示対象を短く発声するという音楽上の指示であり、一部に漢語の促音化と母音の無声化のような言語的特徴を反映する場合があるということになる。しかしながら梵語讚においては基本的に一字が独立して唱えられたため、日常会話で起こる促音化や母音の無声化といった言語的現象が歌謡に反映しにくいものと考えら

れる。それでは梵語讚の譜本において、「火」はどのような理由で付されているのだろうか。以下このことについて検証したい。

記号「火」について天台宗梵語讚の譜本を見ると、その付される対象として次の二つのタイプがある。

- I 本行の音訳漢字に対して付されるもの
- II 節博士の一部に対して付されるもの

このうち、「II 節博士の一部に対して付されるもの」は節博士が示す旋律の一部に対して、その長さを指定するものと考えられるが、詳細は浅田（一九九九、二〇一四）に譲り、本稿では「I 本行の音訳漢字に対して付されるもの」を中心に考察する。

天台梵語讚の譜本において管見に入ったIの全例を以下に示す。なお用例は概ね書写年代あるいは刊行年代の順に資料ごとに示し、火が付された前後の字とともに掲出する。振り仮名、合符など、なるべく本文に近い形で示したが、声点は割愛した。

○勝林院藏声明集（二卷抄）（南北朝時代文保三年（一三一九）写。『續天台宗全書 法儀I』所収）

〔仏讚〕你<sub>ム</sub>火南

〔吉慶梵語讚〕素<sup>ソ</sup>隸<sup>リ</sup>、怛<sup>タ</sup>他<sup>タ</sup>、此<sup>シ</sup>火<sup>ヒ</sup>哩<sup>リ</sup>、踰<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>、娑<sup>サ</sup>

曩<sup>ナ</sup>、怛<sup>タ</sup>一<sup>ツ</sup>寫<sup>シヤ</sup>、尾<sup>ヒ</sup>火<sup>ハ</sup>曩<sup>ナ</sup>、縛<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>、縹<sup>ヒヤ</sup>火<sup>ハ</sup>步<sup>フ</sup>、麼<sup>マ</sup>火<sup>ハ</sup>蘭<sup>ラン</sup>、

櫛<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>觀<sup>クワン</sup>、舍<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>縛<sup>フ</sup>

〔阿弥陀讚〕底<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>孕<sup>ユウ</sup>

○叡山文庫藏〔声明抄〕（江戸時代初期刊）

〔大讚〕地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>

〔吉慶讚梵語〕窠<sup>ソ</sup>火<sup>ハ</sup>你<sup>ニ</sup>、素<sup>ソ</sup>火<sup>ハ</sup>隸<sup>リ</sup>、怛<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>縛<sup>ハ</sup>、你<sup>ニ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、此<sup>シ</sup>

哩<sup>リ</sup>、踰<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>曳<sup>エイ</sup>、答<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>縛<sup>フ</sup>、你<sup>ニ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、縛<sup>フ</sup>火<sup>ハ</sup>步<sup>フ</sup>、

磨<sup>マ</sup>火<sup>ハ</sup>蘭<sup>ラン</sup>、底<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>、櫛<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>觀<sup>クワン</sup>、舍<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>縛<sup>フ</sup>、

〔普賢菩薩行願讚〕咩<sup>サ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、左<sup>サ</sup>火<sup>ハ</sup>阿<sup>ア</sup>、鼻<sup>ヒヤ</sup>火<sup>ハ</sup>夜<sup>ヤ</sup>

○魚山六卷帖（江戸時代後期刊）

〔大讚〕地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>

〔仏讚〕你<sup>ニ</sup>火<sup>ハ</sup>南<sup>ナン</sup>

〔百八讚〕畢<sup>ヒ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>

〔吉慶梵語讚〕素<sup>ソ</sup>火<sup>ハ</sup>隸<sup>リ</sup>、怛<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>他<sup>タ</sup>、此<sup>シ</sup>火<sup>ハ</sup>里<sup>リ</sup>、踰<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>、娑<sup>サ</sup>火<sup>ハ</sup>曩<sup>ナ</sup>、

地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>曳<sup>エイ</sup>、尾<sup>ヒ</sup>火<sup>ハ</sup>曩<sup>ナ</sup>、縛<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>步<sup>フ</sup>、麼<sup>マ</sup>火<sup>ハ</sup>蘭<sup>ラン</sup>、櫛<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>都<sup>ト</sup>、舍<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>縛<sup>フ</sup>、

〔普賢菩薩行願讚〕乞<sup>キ</sup>火<sup>ハ</sup>里<sup>リ</sup>、咩<sup>サ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、里<sup>リ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、你<sup>ニ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、

左<sup>サ</sup>火<sup>ハ</sup>阿<sup>ア</sup>、咩<sup>サ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、捉<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>也<sup>ヤ</sup>、尾<sup>ヒ</sup>火<sup>ハ</sup>阿<sup>ア</sup>、鼻<sup>ヒヤ</sup>火<sup>ハ</sup>夜<sup>ヤ</sup>

〔阿弥陀讚〕底<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>孕<sup>ユウ</sup>

〔驚覺真言〕囉<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>日<sup>ジ</sup>、地<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>瑟<sup>セン</sup>、姪<sup>タ</sup>火<sup>ハ</sup>昨<sup>ム</sup>

以上の例を見ると、このような本行の漢字と漢字の間に付される「火」は、南北朝時代あたりから天台宗

系統の梵語讚の譜本に見え始めるといふことになる。因みに真言宗相応院流系統の梵語讚の譜本に目を転じると、鎌倉時代から使用されたと見られるものがある。

○金沢文庫藏北方天讚 合天秘曲（鎌倉時代写。『金

沢文庫資料全書 第八卷』所収）

室<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>羅<sup>ラ</sup>火<sup>ハ</sup>曼<sup>マン</sup>、支<sup>シヤ</sup>火<sup>ハ</sup>利<sup>リ</sup>（北方天讚）

ただし相応院流の梵語讚譜本ではこのような本行字間方式はあまり受け継がれなかったようで、金沢文庫所蔵の称名寺関係の声明譜にも梵語讚では右の例以外には見出せなかった。また真言宗系統の南北朝以降の譜本で管見に入つたのは次の例のみであった。

○仁和寺藏法則集（第八三函四三号・南北朝時代）

莫<sup>マク</sup>火<sup>ハ</sup> クヲハカスカニイソ、底<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>野<sup>ヤ</sup>

漢語についても見ておくと、字間に「火」が用いられる例は、浅田（一九九九）で紹介したように、鎌倉時代の資料から比較的多くの用例を拾える。ここでは天台宗大原流系統と真言宗相応院流系統の資料を一つずつ取り上げ、再び掲げる。

表1 本行の音訳字に対して付される「火」の使用状況  
 (△は一資料にしか見出せないもの、○は二資料以上に見出せるもの)

		鎌倉	南北朝	室町以降
真言宗	漢語	○	○	○
相応院流系統	梵語	△	△	
天台宗	漢語	○	○	○
大原流系統	梵語		○	○

○大原三千院藏戒讚歎次第(圓融藏俯一箱四七号、鎌倉時代永仁三年(一二九五)写)  
 至<sup>火</sup>心、一<sup>火</sup>切、虚<sup>火</sup>空<sup>火</sup>火<sup>火</sup>藏、等<sup>火</sup>火<sup>火</sup>火<sup>火</sup>益(大懺悔)  
 ○金沢文庫藏(聲明集抄覚意五音博士)(鎌倉時代写)  
 至<sup>火</sup>心、成<sup>火</sup>無<sup>火</sup>上<sup>火</sup>道(小懺悔)

これらを概観すると、両流派の使用状況としては表1のようにまとめられる。真言宗系統も天台宗系統も、「火」は漢語に対して多く使用されており、梵語に関しては使用例が少ない。また節博士に付される「火」と比べると、明らかに字間の「火」は少数であり、鎌倉時代から江戸時代までその状況は変わらない。以上から、もともと漢語において、節博士に対して使用していた「火」を本行の漢字に対して転用するということが真言宗で

行われ、さらに漢語声明のみならず梵語讚の譜本にも使用するようになったという流れが推定できる。その影響かどうかは判断し難いが、天台宗でも梵語讚譜本に南北朝期以降採用され、真言宗では衰退したが天台宗では継続的に使用されたということになる。

さて、それでは天台梵語讚における「火」は、譜本においてどのような機能を担っているのだろうか。以下、先の例で複数の譜本に重複しているものを除いた上で、一つ一つの例と梵文の該当部分に対応させて讃ごとに掲げる。なお、対応する梵文が不明なものは除外し、「火」の前後の音訳字に対応するローマナイズの部分を傍線で示した。音訳字の振り仮名は『魚山六卷帖』等の諸本における仮名、声点を参考に付した。また、同一語に複数の「火」が付されている場合はそれぞれ別に示した。

(仏讚) 吠<sup>火</sup>你<sup>火</sup>南 *vodanam*

(吉慶梵語讚) 那<sup>火</sup>一<sup>火</sup>集<sup>火</sup>你<sup>火</sup> *garbhad asid ihavarataro*、

素<sup>火</sup> 隸<sup>火</sup>囉 *surair*、 怛<sup>火</sup> 他<sup>火</sup> 隸<sup>火</sup> 寫 *tahāgatasya*、 怛<sup>火</sup>

縛<sup>火</sup> 你<sup>火</sup> 也 *tavādya*、 怛<sup>火</sup> 縛<sup>火</sup> 你<sup>火</sup> 也 *tavādya*、 尾<sup>火</sup> 顛<sup>火</sup> 此<sup>火</sup>

哩<sup>火</sup> 跢<sup>火</sup>、 囉<sup>火</sup> 跢<sup>火</sup> *vinīstrāvah*、 尾<sup>火</sup> 顛<sup>火</sup> 此<sup>火</sup> 哩<sup>火</sup> 跢<sup>火</sup>、 囉<sup>火</sup> 跢<sup>火</sup>

*vinīstrāvah*、 寫<sup>火</sup> 囊<sup>火</sup> 比<sup>火</sup> 但<sup>火</sup> 一<sup>火</sup> 寫 *snapiṅgasya*、 物<sup>火</sup> 一<sup>火</sup> 哩<sup>火</sup>

地<sup>火</sup> 曳 *vṛddhyai*、 答<sup>火</sup> 縛<sup>火</sup> 你<sup>火</sup> 也 *tavādya*、 答<sup>火</sup> 縛<sup>火</sup> 你<sup>火</sup>

也 *tavādya*、尾 *vi* 曩 *āsa* 捨 *vināsa*、縛 *vi* 日羅 *śāraṅga* 姿 *śāraṅga* 顛 *śāraṅga*  
*var'āsane*、縛 *vi* 步 *śāraṅga* 縛 *bahūya*、慶 *ma* 蘭 *maram*、尾 *śāraṅga*  
 一 余 *śāraṅga* 底 *śāraṅga* 野 *vi* *śāraṅga*、櫻 *śāraṅga* 觀 *śāraṅga* 盧 *śāraṅga*、顛 *śāraṅga* 舍 *śāraṅga* 縛 *śāraṅga* 姿 *śāraṅga* 寧 *śāraṅga*  
*niśāvasāne*  
 〔阿弥陀讚〕素 *śāraṅga* 法 *śāraṅga* 一 縛 *śāraṅga* 底 *śāraṅga* 卒 *śāraṅga*、*sukhavalīn*、暮 *śāraṅga* 護 *śāraṅga* 愚 *śāraṅga* 火 *śāraṅga* 拏 *śāraṅga*  
 火 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 恒 *śāraṅga* 曩 *śāraṅga* 者 *śāraṅga* 琰 *śāraṅga*、*bahugunaratnasamcayām*、暮 *śāraṅga* 護 *śāraṅga* 愚 *śāraṅga*  
 火 *śāraṅga* 拏 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 恒 *śāraṅga* 曩 *śāraṅga* 者 *śāraṅga* 琰 *śāraṅga*、*bahugunaratnasamcayām*  
 〔北方天讚〕吠 *śāraṅga* 室 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 曼 *śāraṅga* 荼 *śāraṅga* 耶 *śāraṅga*、*vaiśṛavāṇāya*、吠 *śāraṅga* 室 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga*  
 火 *śāraṅga* 曼 *śāraṅga* 荼 *śāraṅga* 耶 *śāraṅga*、*vaiśṛavāṇāya*、只 *śāraṅga* 利 *śāraṅga* 火 *śāraṅga* 曳 *śāraṅga*、*śrī*  
 〔孔雀經讚〕目 *śāraṅga* 陀 *śāraṅga*、*muktāya*、尾 *śāraṅga* 目 *śāraṅga* 陀 *śāraṅga* 耶 *śāraṅga*、*vimuktāya*、  
 尾 *śāraṅga* 目 *śāraṅga* 陀 *śāraṅga* 曳 *śāraṅga*、*vimuktāye*  
 〔天龍八部讚〕波 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 鎧 *śāraṅga* 濕 *śāraṅga* 火 縛 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 當 *śāraṅga*、*parameśvaratām*、  
 波 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 鎧 *śāraṅga* 濕 *śāraṅga* 火 縛 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 當 *śāraṅga*、*parameśvaratām*  
 〔百八讚〕柰 *śāraṅga* 畢 *śāraṅga* 也 *śāraṅga*、*devyā*  
 〔大讚〕尾 *śāraṅga* 地 *śāraṅga* 野 *śāraṅga* 一 底 *śāraṅga*、*vidyate*  
 〔普賢菩薩行願讚〕囉 *śāraṅga* 惹 *śāraṅga* 乞 *śāraṅga* 里 *śāraṅga*、*rajāgri*、地 *śāraṅga* 一 沒 *śāraṅga* 咎 *śāraṅga* 火  
 也 *śāraṅga* 一 弭 *śāraṅga*、*dhimucyami*、慶 *śāraṅga* 里 *śāraṅga* 火 也 *śāraṅga*、*maityā*、囉 *śāraṅga* 你 *śāraṅga* 火 也 *śāraṅga* 尾 *śāraṅga*  
*vidya-vilepana*、夜 *śāraṅga* 左 *śāraṅga* 火 阿 *śāraṅga* 拏 *śāraṅga* 踰 *śāraṅga* 羅 *śāraṅga* 也 *śāraṅga*、*ca anuttara*、  
 奔 *śāraṅga* 拏 *śāraṅga* 也 *śāraṅga*、*punya*、尾 *śāraṅga* 沒 *śāraṅga* 地 *śāraṅga* 也 *śāraṅga*、*vibudhya*、薩 *śāraṅga* 一 尾 *śāraṅga* 火  
 阿 *śāraṅga* 一 弟 *śāraṅga* 灑 *śāraṅga* 弭 *śāraṅga*、*sarvi*、鼻 *śāraṅga* 一 夜 *śāraṅga* 左 *śāraṅga* 一 弭 *śāraṅga*、  
*abhiyācamī*

〔驚覺真言〕囉 *śāraṅga* 日 *śāraṅga* 盧 *śāraṅga*、*vaiva*、地 *śāraṅga* 火 瑟 *śāraṅga* 姪 *śāraṅga* 咩 *śāraṅga*、*tsiṣha*、地 *śāraṅga*  
 火 瑟 *śāraṅga* 姪 *śāraṅga* 咩 *śāraṅga*、*tsiṣha*、*hum*  
 これら傍線を引いた部分を更に抜き出し、「火」が  
 付されている部分が原梵語においてどのような部分  
 かによって整理してみる(「火」が置かれる部分に「||」  
 を挿入して示す)。

A 梵語の音節の境界に対応する部分に「火」が置かれる  
 もの

a 二字とも唱えるもの(母音||子音) 19例

*śi=di* 唵、*su=rai* 素、*ta=hā* 恒、*ta=va* 恒、  
 縛、*ta=va* 踰、*ta=va* 答、*vi=ra* 尾、*va=*  
 縛、*ba=ḥu* 縛、*mā=raṅ* 麼、*ca=tu* 移、*va=*  
 縛、*śa=va* 舍、*su=pa* 思、*pa=ra* 拏、*ra=va* 羅、  
 曼、*va=ra* 縛、*va=* 囉、*ti=ś* 地、*tha=hum*  
 姪、*pa=* 咩

b 一字目のみ唱えるもの 4例

*ca=* 左、*hi=ya* 鼻、*vi=* 尾、*di=* 你、  
 南

B 梵語の音節内部に対応する部分に「火」が置かれるも

の

ア 子音と子音の境界に「火」が置かれるもの（子音<sub>二</sub>子音）19例

a 二字とも唱えるもの

s=此<sub>二</sub>火<sub>一</sub>哩<sub>レ</sub>、s=na<sub>二</sub>火<sub>一</sub>婆<sub>レ</sub>、s=ra<sub>二</sub>火<sub>一</sub>室<sub>レ</sub>、muk=ta<sub>二</sub>火<sub>一</sub>目<sub>レ</sub>陀、  
muk=ta<sub>二</sub>火<sub>一</sub>目<sub>レ</sub>陀、muk=ta<sub>二</sub>火<sub>一</sub>目<sub>レ</sub>陀、s=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>濕<sub>レ</sub>縛

b 一字目のみ唱えるもの

d=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>你<sub>レ</sub>也、ddh=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>地<sub>レ</sub>曳、d=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>你<sub>レ</sub>也、t=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>底<sub>レ</sub>昔  
野、v=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>壘<sub>レ</sub>也、d=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>地<sub>レ</sub>野、s=ri<sub>二</sub>火<sub>一</sub>佐<sub>レ</sub>里、c=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>皆  
地<sub>レ</sub>也、l=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>里<sub>レ</sub>也、d=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>你<sub>レ</sub>也、ñ=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>拏<sub>レ</sub>也、dh=ya<sub>二</sub>火<sub>一</sub>  
地<sub>レ</sub>也

イ その他2例

a 二字とも唱えるもの

ニ<sub>二</sub>火<sub>一</sub>底<sub>レ</sub>孕<sub>レ</sub>、ニ<sub>二</sub>火<sub>一</sub>利<sub>レ</sub>曳

これらを見ると、「火」は梵語との対応から見て二通りの理由で付されていると考えられる。一つは音節相互の関係を他の結合よりも緊密にするというもので、Aがそれにあたる。これらは後述するように、梵語讀において音節と音節との間を通常よりも素早く唱えるよう指示するものである。ただし2音節目が母音、半母音の場合には、A bの「左<sub>二</sub>火<sub>一</sub>阿」「鼻<sub>二</sub>火<sub>一</sub>夜」「尾

火阿」ように融合して一音節として唱えられる（一字目しか読まないことは、二字目に振り仮名、節博士が付されないことから分かる）。なお、「你<sub>二</sub>火<sub>一</sub>南」については何らかの原因で梵語<sub>二</sub>にあたる部分が欠落した形で定着したものである。

もう一つはBアのように梵語において重子音が音訳字二字に対応している場合に、その二字の緊密性が伝承音で保たれ、記号によって示されていると見られるものである。両者とも音楽上においてその緊密性は、a前字と後字の時間上の間隔の短さに現れる場合と、b一音節として融合したものを一字目として唱え、二字目は読まないというように現れる場合とがある（これらもA bと同様に、二字目に振り仮名、節博士が付されていないこと<sub>二</sub>から二字目を読まないことが分かる）。なおBイの「底<sub>二</sub>火<sub>一</sub>孕<sub>レ</sub>（<sub>二</sub>）」「利<sub>二</sub>火<sub>一</sub>曳<sub>レ</sub>（<sub>二</sub>）」については、長母音<sub>二</sub>を二字で音訳したものとかが考えられ、この場合も二字の緊密性の指示としてBアaに準じて考えられる。

頻度はAの方がやや優勢だが、Aのような音節境界と、Bアのような子音と子音の境界の、梵讀に出現する総数を考えると、圧倒的にAの音節境界の方が多い（当然のことであるが、音節の境界は全ての音節ごとに現れるが、重子音は全ての音節に現れるわけではない）。つまり総数に対する割合を考えたとき、子音と

子音の境界に「火」が付される確率は、音節と音節の境界に付される確率よりもはるかに高いものと考えられる。

では、日本における梵語讚の譜本において、原語における子音と子音の境界にあたる部分に「火」が付されやすいという事実は、どのような声明唱詠の実態を反映しているのだろうか。

まず、恐らく円仁が本邦に将来した梵語讚は、しばらく梵語原音に近い形で伝承されており、重子音は重子音として、あるいはそれに近い形で唱えられていたと推定できる（例えば梵語の音節 *ina*（恒曩）を *ina* か *iyana* などと唱えていたと考えられる）。このことは、沼本（二〇一一）の「梵語の声明が本邦へ将来された最初の時点には、音楽的旋律を伴った詠唱法においては、原梵語原音の音韻論的長短がその詠唱法の基盤に生かされていた事を物語る」（一七頁）という指摘とも符合する。その後、沼本（一九九七）で指摘されるように、次第に梵語原音でなく漢字音によって梵語讚が唱えられるようになる。そのような状況で、梵語の重子音のうち二字で音訳されたものについては、音訳字一字ごとに発音され、多くの場合二音節で読誦されるようになっていく（例えば梵語の音節 *ina*（恒曩）を *tana* や *tanau* などと唱えるようになる）。（Bアの「火」は、漸次このような変化が進む中

で、母音を伴わずに一音節として発声していたときの音声上の短さが散発的に譜本上に掬い取られる形で保存されたものと考えられる。その際、重子音の二番目の子音が $\gamma$ の音節のみは、日本漢字音の音韻体系における拗音節として把握された結果、Bアbのように融合した形で定着している。その他の場合は、Bアaのように二音節として把握されながらも、元々原語の子音連続にあった発音上の緊密さが音楽的特徴として残されて定着したと見られる。

次にAにどのような理由で「火」が付されているかという点についてだが、こちらは必ずしも明確な言語的条件を考えがたい。恐らくBのように言語的な理由から付されるものがあるなかで、そこからの類推によって新しく増えたものがあると推定する。例えばA bの鼻<sup>ヒ</sup>火夜 (*biya*)などは、梵語原音に近い誦唱が行われなくなったのちに、Bアbの畢<sup>ヒ</sup>火 (*biya*)などと同一視されて一つの音節として唱えられるようになり、それが譜本において「火」によって表現されたという過程を想定できるのではなからうか。

またAについては、純粹に音楽上の理由で付されたものもあつたと思われる。特に定曲と言われる一定の拍子にのせて偈頌を唱えるものについては、拍子を守るために二字を一拍で読む必要があつたことも考えられる。先に用例の見た梵語讚のうち、吉慶梵語讚、

百八讚、大讚、普賢菩薩行願讚は定曲であり、仏讚、阿弥陀讚、北方天讚、孔雀経讚、天龍八部讚、驚覺真言は拍子のない序曲である。「火」の用例の多くは拍子にのせて唱詠する部分に見られ、このような場合は拍子を守るために二字を一纏めにして歌う場合があり、その誦唱上の特徴が「火」によって写し取られたものと考えられる。

## 「延」

次に記号「延」について、天台梵語讚における使用の実態を把握しておく。まず「延」が付される位置については、①節博士上に置かれているものと、②本行の音訳字に付されるものがあり、その全ての例が拍子にのせて唱える定曲において使用される。

①節博士上に置かれるもの

麼<sup>延</sup>〔叡山文庫蔵〔声明抄〕・大讚〕

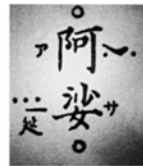
②本行の音訳字に付されるもの

謨<sup>延</sup>〔叡山文庫蔵〔声明抄〕・普賢菩薩行願讚〕

因みに真言宗系統の梵語讚譜本では、②本行の音訳

図1『魚山聲明全集』

の拍子点



字に付されるものは使用されず、①節博士上に置かれるもののみが見られ、節博士が示す旋律の特定部分を特に長く発声するよう指示する記号であると考えられる。一方で、ここに示す天台宗梵語讚譜本における

「延」は、真言宗のものと同機能としては少し異なり、①②とも字単位で特定の拍子を指定する役割を持つ。

この「延」の機能を確認するために、現行の中山玄雄『魚山聲明全集』の節博士(図1)を見てみると、拍子が「拍子点」という点によって節博士上に示されている。

ここでは、「阿」の節博士に対して2つの点が付されており、「阿」に対して2拍が配当されていることが分かる。次字「娑」の節博士には「延」という記号が付けられたうえで、3つの点を加えられており、ここから「娑」が3拍を要して唱えられることが知られる。すなわち「延」の付された字は、付されないものに比べて一・五倍の長さを有することになる。このように天台梵語讚譜本における「延」は、拍子を有する定曲において、字単位で延拍子と呼ばれる拍子を特に指定するものであり、機能上は①も②も変わらない。以下に②の例を示す。



○叡山文庫藏「声明抄」(江戸時代初期刊)

〔吉慶讚梵語〕 奴灑尾トシ延ヒ 囊捨ナウシヤ

〔百字讚〕 跛ヒ 羅シ 也ヒ 隣シ、悶遮ヒ

〔普賢菩薩行願讚〕 曩ヒ 謨ヒ、阿勢ヒ 欽ヒ、縛ヒ 左ヒ

○魚山六卷帖「江戸時代後期刊」

〔百八讚〕 慕ヒ 瑟知ヒ

〔普賢菩薩行願讚〕 曩ヒ 謨ヒ、阿勢ヒ 欽ヒ、縛ヒ 左ヒ

諸本に共通するものを整理して、以下に対応する梵語とともに示す。

〔百八讚〕 慕ヒ 瑟知ヒ *muṣṭi*

〔吉慶讚梵語〕 奴灑尾トシ延ヒ 囊捨ナウシヤ *doṣa-vinaśa*

〔百字讚〕 跛ヒ 羅シ 也ヒ 隣シ *Prayaccha*、悶遮ヒ *mūṣa*

〔普賢菩薩行願讚〕 曩ヒ 謨ヒ *Namaḥ*、阿勢ヒ 欽ヒ *aśeṣam*、

縛ヒ 左ヒ *vāca*

これらを見ると、特に長母音に対して「延」が対応しているのは「縛左」(vāca)のみで、「延」の用例全体において梵語原音が「延」と関係しているとは判断できない。「縛左」の例なども、原音 *vā* に対してバ

クと読んでおり、梵語の特徴を保存しているというよりは、むしろ漢字音に引かれて読んでいる部分であると判断できる。従って「延」に関しては、漢字音に従って誦唱するなかで、その部分に他より多くの拍子要素を要して唱えるという音楽上の特徴が付け加わり、その特徴が譜に写されたものと解するのが妥当である。すなわち、梵語原音の影響は認められない。

なお、真言宗梵語讚では、長く唱える記号として「長」が使用されるが、これらは天台梵語讚では使用されない。

### 「一」

これまで見てきた諸記号は天台梵語讚だけでなく他の流派でも使用されており、その中で梵語讚に特有な機能を持つものに特に注目して述べてきた。ここで紹介する「一」は、これまでの記号と異なり天台梵語讚の譜本にのみ見られるもので、字音直読の声明や和語の声明では観察されない。また流派の面でも、天台大原流の譜本にのみ見られ、他の流派のものに使用された形跡のないものである。

このようにごく限られた範囲で用いられる「一」は、振り仮名として使用された片仮名とともに用いられ

るもので、少なくとも視覚上は、現代語の表記に使用される長音記号に似ている。以下に資料ごとに例を示す。

○叡山文庫蔵「声明抄」(江戸時代初期刊)

〔百字讚〕 擺耶

〔百八讚〕 曩謨、羅怛曩、達磨、達弭、羯磨、

羯弭、羅怛寧、達摩、達弭、羅吃叉

○魚山六卷帖(江戸時代後期刊)

〔大讚〕 薩縛、達摩影、達摩影、裕濂、摩、囉

一句、薩囉

〔百字讚〕 擺耶、訖一都

〔百八讚〕 惡、曩一陸、曩謨、羅怛曩、羅一怛寧、

達摩、達弭、羯磨、羯弭、羅怛寧、

達摩、達弭、羅吃叉、羯磨、羯弭、囉

吃叉、蔡瑟知

〔普賢菩薩行願讚〕 曩謨三一滴多、囉左、達摩

多、嚧乞灑一也、薩鏤、囉左、你物、穠婆

麼以

〔阿弥陀讚〕 底娃

さて右に示すように、「一」が現れる資料はすべて

天台大原流の譜本である。同じ天台宗系統でも、金沢文庫蔵の称名寺関係の資料には見出されない。他にも大原三千院に所蔵される南北朝時代写の『胎藏界金剛界』『胎藏界』にも同一の記号が使用されているのが確認できる。鎌倉時代の譜本には確認できないので、南北朝時代に使用されはじめ、江戸時代の刊本まで伝承されていると見られる。この記号がどのような機能を有しているのか、実は未だ明確でない点も多いのであるが、筆者なりに推定したところを提示しておきたい。

まず梵語原音との関係を見ておく。諸本で重複している例を除き、対応部分をおおむね梵語の一語単位で掲げる。ただし「一」が付される位置に関して諸本間に異なる場合は、刊年の古い例に従う。対応する梵文については注5に示した文献を参考にし、梵文が不明の語は除外した。「一」が付された前後の仮名に対応する梵文の部分に傍線を引いておく。

〔百字讚〕 弩一播擺耶 anupalaya、訖一都 anurakto

〔百八讚〕 惡、曩一陸 aksobhye、曩謨 namo、羅一怛曩

a-ratna、羅一怛寧 a-ratne、達磨 dhama、達弭

dharme、羯磨 garbha、羯弭 garbhe、羅怛寧

a-ratne、達磨 dharna、達弭 dharme、羯磨

garbha 羯 胝 garbhe 囉 吃 又 vajra-aksa 募 瑟  
 musi 知

〔大讃〕 薩縛 sarva 達 磨 踰 dharmata 達 磨 踰

dharmata 薩 縛 sarva

〔普賢菩薩行願讃〕 曩 謨 Namaḥ 嚩 左 yāca 達 磨  
 sarvata 多 dharmata 嚩 乞 灑 一 也 aksaya 薩 鏤  
 sarvām 嚩 左 yāca 你 物 嚩 底 nirvṛti 穠 婆  
 麼 以 śubham mayi

〔阿弥陀讃〕 素 佉 嚩 底 姪 sukhavati

次に、「一」が付される前後の部分のみを抜き出し、  
 原梵語との対応によっていくつかの類型に分類して  
 みる。なお、梵文に挿入した「二」は振り仮名におい  
 て「一」が付された部分に対応する。一語に複数の「一」  
 が見られる場合は、「一」ごとにその都度掲出した（当  
 該例で問題としない。「一」は括弧の中に入れた）。

○梵語の音節と音節の境界に対応する部分に付されたも

の（母音＝子音） 17例

囉 耶 la=ya 曩 謨 na=mo 囉 a=ra 囉 恒 ra=na  
 囉 a=ra 囉 恒 ra=na 囉 恒 ra=ne 達 磨  
 dha=rma 羯 磨 ga=rha 薩 縛 sa=va 達 磨

dha=rma 麼 踰 rma=ta 薩 縛 sa=va 達 磨 dha=rma  
 麼 踰 rma=ta 薩 鏤 sa=rvam 麼 以 ma=yi

○梵語の音節内部に対応する部分に付されたもの 23例

・子音と子音の境界（子音＝子音）

惡 劫 ak=so 恒 曩 t=na 達 磨 t=ma 達 弭  
 r=me 羯 磨 r=bha 羯 胝 r=dhe 恒 寧 t=ne  
 達 磨 r=ma 達 弭 r=me 羯 磨 r=bha 羯 胝  
 r=bhe 瑟 知 s=i 薩 嚩 r=va 達 磨 r=ma 達 磨 r=ma  
 薩 嚩 r=va 乞 灑 k=sa 薩 鏤 r=vam 你  
 物 嚩 底 nir=vṛti

・主母音と末子音の境界（母音＝子音）

薩 鏤 rva=ṃ 婆 娑 bha=ṃ 底 姪 ti=ṃ

・その他

囉 吃 又 ra

○梵語の語末に対応する部分に付されたもの 7例

達 磨 dharmā 達 弭 dharme 羯 磨 garbha 羯  
 胝 garbhe 達 弭 dharme 曩 謨 Namaḥ 穠 婆  
 śubham

○梵語に対応する部分がないもの 4例

你 物 嚩 底 ni=vṛti 訖 都 k=lo 嚩 左 va=ca 嚩 左  
 vā=ca

このように梵語讚譜本における「ー」は、原梵語との対応関係から見ると、現代語表記における「ー」とは異なり長母音とは対応していないようである（長母音に対応しているのは薩<sup>サール</sup>鏤<sup>ハム</sup> *saam*、底<sup>チム</sup>姪<sup>ニ</sup> *chim*のみ）。むしろ「火」と同じように、音節内の重子音の境界に付されたものも多く、「火」との類似性が指摘できる。しかし一方で、次のように「火」と異なる面も指摘できる。

- ① 同じ語に付されているものでも、例によって付され方に差が見られる。（例えば「達磨」に対して、「タルーマー」「タールーマ」「タルーマ」という複数の種類のパターンが出現する）
- ② 字音の二文字目にあたる「ル」「ラ」「ク」「ム」の前後に多く見られる。

①に示したように、同語に複数のやり方で「ー」が付される場合の多いことは、この記号が言語的な条件によって強く支配されているのではなく、何らかの音楽的な条件によって支配される傾向が強いことを示唆する。そこで曲目に注目してみると、その多くが拍子にのせて唱える定曲であることに気付く（表2参照）。

このように天台梵語

讚譜本においては、序曲の譜本には「ー」が使用されることが少なく、定曲の譜本には「ー」が使用されることが多い。この傾向は「火」よりも一層顕著であり、「ー」という記号が拍子と密接な関係を有していることが明らかとなる。

そこで次に、定曲である百八讚の例に注目してみる。江戸時代初期刊の叡山文庫蔵『声明抄』から例を引く。

縛日羅達摩

縛日羅達摩

この部分は諸本ほとんど仮名の配り方が同じであ

表2 拍子による梵語讚の分類と「ー」の使用の関係

	「ー」が使用される譜本	「ー」が使用されない譜本
序曲（拍子のない曲）	仏讚、阿弥陀讚	四智梵語讚、驚覚真言、孔雀経讚、天龍八部讚、北方天讚、緊那羅天讚、大日小讚、僧讚、法讚、蓮華部讚、金剛部讚
定曲（拍子のある曲）*	百字讚、百八讚、大讚、普賢菩薩行願讚	占慶梵語讚

\*ここでは、一部に拍子のある部分が存する俱曲も含む。

り、節博士の形状が異なるだけで、振り仮名や節博士に配置された仮名も同じ位置に付される。したがって、譜本上はほぼ変化せずに伝承されている部分であると考えることができる。

この例において「達摩」については、「ル」が上字「達」の節博士の上にあることから、拍子の上で「ル」は「達」の節博士に対応する唱詠に含まれていることが分かる。一方で「達弭」の「ル」については、下字「弭」の節博士の上であり、拍子上「ル」は「弭」の節博士に対応する唱詠に含まれていることになる。つまり二つの「ル」は、それぞれ次のような拍子構造のなかに配置されていることになる。

(達摩) 一タ ル一マ 一  
(達弭) 一タ 一ルミ一

この時「達摩」には「タールーマ」、「達弭」には「タルーミー」という振り仮名が付されている。ここから、「タールーマ」の「一」は、「タ」と「ル」と「マ」が拍子上の緊密性を持って唱えられるということを示しており、「タ ルーミー」は、「タ」が拍子上独立しており「ル」と結合しないこと、また「ル」と「ミ」とが拍子上の緊密性を持って唱えること、「ミ」を長く唱えず、すぐに後続のモーラに移ることを示してい

ると考えられる。つまりこの「一」は、「ル」を拍子上どのように配置するかを標示するものと捉えらるる。

このように「一」を拍子上の配置を指定する記号と考えれば、先に指摘した、例によって付され方が異なるという特徴(①)だけでなく、「ル」「ラ」「ク」「ム」を含む語に多いという特徴(②)もうまく説明できる。すなわち、「ル」「ラ」に関しては、一つの音訳字に対して例外的に2音節が当てられるものの2音節目にあたり、しかも漢字音では出現せず、梵語誦読に特有な伝承音であることから、前に位置する音節から独立して分節されやすいものと考えることができる。また「ク」も同様に1音訳字が2音節2モーラを形成し、1音節2モーラに相当するような「○ウ」「○イ」「○ツ」に比べて前の音節からの独立性が高い。「ム」については、これが鼻音韻尾として「ㄹ」で唱えられていたか、開音節化して「mu」で唱えられていたかは定かではないが、「ㄹ」で唱えられていたとしても浅田(二〇〇四)で指摘したようにその独立性は高く、前のモーラから独立的に捉えられやすいモーラであったと言える。よって、いづれにしても1音訳字が2モーラに対応するものなかで、2モーラ目が分節感覚として独立性が高いものに「一」が付されているということになる。これらのモーラは、拍子が一つのまとまり

である小節を構成するなかで、前のモーラと同じ小節に含ませるか、後ろのモーラと同じ小節に含ませるか、唱詠者の判断に任せられるところが大きかったものと推定される。すなわち「ル」「ラ」「ク」「ム」は拍子上不安定な存在であり、それ故に「ー」によって拍子上の小節所属を明確にする必要があったのではないだろうか。

先に梵語原音との関係を示した時、重子音における子音と子音の境界に付されたものがある程度の割合で存したのは、梵語原音の発音上の緊密性が後世まである程度伝承された結果、拍子上にそれが現れているものと解釈できる。また序曲に使用される「ー」については、用例数が2例と少なく詳細は不明であるが、定曲で使用された拍子上の緊密性からの類推から、「火」と同様に発音上の緊密性を標示するのに用いられたものと解釈しておきたい。

最後に、この記号「ー」の来源について付言しておきたい。先に述べたように、この記号は「火」と機能上重なる部分があるが、前後の緊密性を標示するといふ点では合符とも似たところがある。三者の違いは、合符は形態素間の緊密性を示す傾向が強く、「火」は発声上素早く次に移ることを示す傾向が強く、「ー」は拍子上の小節所属を示す傾向が強いというように説明できる。「ー」は他の二種の記号よりも成立が遅

いが、それは天台声明において拍子が発達し、より厳密な伝授の必要性が高まったのが南北朝期頃であったからであると考えられる。合符や「火」が天台宗では漢字に使用されるものだったのに対して、伝承される梵語讃の拍子をより詳しく譜本上に表現するためには、より細かい言語単位に対応している仮名への注記が必要であった。その時選ばれたのが合符を仮名に対して適用するという方法であったと考えられる。すなわち本稿では、合符と「ー」との機能上の類似から、天台梵語讃の譜本に見られる「ー」は、漢字同土を結合させて一語であることを示す合符を、仮名にも用いることによって拍子標示を実現したものと考えておきたい。

### まとめ

以上天台梵語讃の譜本において見られる諸記号のうち、特に「火」「延」「ー」についてその実態を見てきた。それぞれの記号の機能を簡単にまとめると次の通りとなる。

「火」…実際の詠唱において、上下二字の発声の緊密性を標示する。

「延」…その字が延拍子によって唱えられることを標示する。

「一」…当該モーラが前後どちらの小節に所属するかを明示するため、拍子上の緊密性を標示する。

これらの記号は、いずれも第一義的には音楽的な特徴を標示するものとして使用されているとみることが出来る。しかしながら本稿で報告したとおり、「火」と「一」では音楽的特徴として短く唱えるものには、原梵語の影響が見て取れる場合も多く、梵語に近い形で梵語讚を唱えていた時期の詠唱法が保存されていることが観察される。梵語における重子音は日本梵語音において徐々に開音節化して別個の音節となったが、そのうちの一部は伝承音として開音節化する前の名残を留めて短く唱えられており、その唱詠法が譜本の中に記号によって留められていることになる。すなわち、日常的な梵語讚の誦読において梵語の日本語化が進んでいったが、日本語の音韻体系に基づく唱詠に完全に變化したのではなく、梵語の言語的な特徴は個々の誦読の場における拍子や長短などの音楽的な装飾のなかに取り込まれて伝承されていき、それが南北朝期以降の譜本に反映していると考えられる。

〔注〕

(1) 第六部第五章 促音の小書き表記「ッ」の史的展開

(2) 例えば齋藤(二〇一〇)の「まず第一に伝教大師と弘法大師の密教系声明の将来数の差から結果する初期比叡山の立ち後れ、そして第二に円仁がこの遅れを取り戻すべく積極的に求法を試みていたことである。

『八家秘録』には収載されていないものの、『入唐新求聖教目録』によれば、一覽表にあげたもの以外に二種(天龍八部讚、二種の百八讚、十六讚、吉慶讚等々を、密教を受法した長安から將來していることが分かる。こうした円仁の密教系声明の將來により、叡山声明は急速に豊かになり充実していったといえる。)(一六・一六二頁)という指摘などが挙げられる。

(3) 梵語の声明が本邦へ將來された最初期の時点には、音楽的旋律を作った詠唱法においては、原梵語原音の音韻論的長短がその詠唱法の基盤に生かされていた事を物語る。このことよって、言語的制約が音楽の詠唱法を規定したことが明らかになるのである。

因みに、その様にして長くのばして唱えられる旋律の型は、その節博士は、いずれもネウマ式と見るべきであろうから、初期のものは「/」「\」の如く上がり、下がり、「~」「~」の如く揺り上がり、後上がりの極めて単純な旋律で唱えられていたことを物語る。節博士が梵語長音と切り離されて、複雑な旋律の記述に発達するのはその次の段階であったことになる。(沼本、

二〇一一、一七頁)

(4) 節博士の線上の特定の部分に付され、旋律の一部を短く唱えるよう指示するもの。梵語讚では真言宗系統の譜本に多く用いられ、天台宗系統の譜本での使用は、東寺觀智院藏『秘讚集』(金剛藏第一四九函四号)、東寺觀智院藏『秘讚集』(金剛藏第一四九函五号)、金沢文庫藏(緊那羅天讚・駄都讚)、『金沢文庫資料全書第八卷』一七〇頁、妙音院流)の三譜本のみに見られる。

(5) 梵文偈のローマナイズは次の文献を参考にした。

仏讚…『密教大辞典』「仏讚」の項

吉慶梵語讚…高橋尚夫「吉慶梵讚について」

阿弥陀讚…足利惇氏『Sukhāvativyūha』

北方天讚…梅尾祥雲『秘密事相の研究』、四八四頁

孔雀経讚…田久保周啓校訂『梵文孔雀明王経』

天龍八部讚…高橋尚夫「吉慶梵讚について」、八頁

白八讚…梅尾祥雲『秘密事相の研究』、三五二頁

大讚…酒井紫朗「執金剛阿利沙偈に就いて」

普賢菩薩行願讚…林寺正俊「金剛寺の newly 『普賢菩薩行願讚』サンスクリット音写本」

驚覺真言…梅尾祥雲『秘密事相の研究』二九四頁

(6) この例は叡山文庫藏(声明抄)に見えるが、「耶」とあるところ、「那」とする校訂が為されているため、「那」で記載した。

(7) 清田(一九五七)に「音譯三十七句中終の十七句

は獨特のもので、對比すべき梵文漢藏譯が発見されてゐない」とあり、先に魚山六卷帖等で掲出した「地、穠チヤ、地キヤ、野ツ、跡ツ」「没、哩、地キヤ、野ツ」についても明らかでないためここでは割愛した。ただし他の例から見て、恐らく「*dyā*」に対応する音訳字であると推定できる。

(8) 「梵文陀羅尼の読み方においては、天台宗内でも種々のものが行われていたが、時代が早いものは梵語音に忠実に、時代が降るにつれて漢訳字の漢字音に従う読み方が強くなつて来るといふ、時代的変遷が顕著である。」(沼本一九九七、七七二頁)

(9) ただし真言梵語讚における「長」「持」は、いずれも節博士の上に付されるものである。また「延」は真言宗では講式の譜本に使用されることがある。(浅田、二〇一三)

(10) かつて故沼本克明博士にお見せいただいた紙焼写真に、『魚山六卷帖』とほぼ同様の位置に「一」が使用されていたことを確認したことがある。

〔調査資料〕

神奈川県立金沢文庫編(一九八六)『金沢文庫資料全書 第八

卷』便利堂。

天台宗典籍編纂所編(一九九六)『續天台宗全書 法儀』聲明

表白類聚』春秋社。

中山玄雄(一九六二)『魚山聲明全集』芝金聲堂。

〔参考文献〕



浅田健太郎（一九九八）「声明資料における『ずらし表記』を

巡って」『訓点語と訓点資料』一〇二、四八―六二頁

浅田健太郎（一九九九）「声明資料における補助記号『火』について ―音楽譜における言語事象の現れの一例として

―」『鎌倉時代語研究 第二十二輯』武蔵野書院、二二三―二四二頁。

浅田健太郎（二〇〇四）「漢字音における後位モーラの独立性について ―仏教声楽譜から見た日本語の音節構造の推移

―」『音声研究』八二二、二五―四五頁

浅田健太郎（二〇一三）「講式譜本における長短記号」『島大言語文化』三六、一―二七頁。

足利惇氏（一九六五）『Sukhāvaiṣyūhaḥ Hoṣōkan』

清田寂雲（一九五二）「執金剛阿利沙偈の譯讀について」『密教文化』一六、五六―六四頁。

齋藤圓眞（二〇一〇）『天台渡海僧の史的研究』山喜房仏書林。

酒井紫朗（一九三九）「執金剛阿利沙偈について」『密教研究』六八、一〇七―一九頁。

高橋尚夫（一九七九）「古慶梵讀について」『大正大学総合佛敎研究所年報』創刊号、一六―二七頁。

田久保周譽（一九七二）『梵文孔雀明王經』山喜房佛書林。

母尾祥雲（一九八二）『秘密事相の研究』高野山大学密敎文化研究所、臨川書店。

沼本克明（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院。

沼本克明（二〇一三）『漢訳仏典の「引」注記と原節博士の機能』『安田女子大学大学院文学研究科紀要合冊』一七、一

一一八頁。

林寺正俊（二〇〇九）「金剛寺の新出『普賢菩薩行願讀』サン

スクリット音写本」『印度哲学仏敎学』二四、八三―一一〇頁。

密敎大辞典再版委員会編（一九七〇）『密敎大辞典（増訂第一版）』法蔵館。

〔付記〕

本稿で利用した声明譜の原本調査に際しては、各寺院、図書館、研究室の関係各位に格別のご配慮を賜った。そのご厚情に対し、ここに記して感謝申し上げます。なお本稿は、平成二十五年科学硏究費補助金（若手硏究（B））による硏究成果の一部である。

（本学准教授）